

<http://sousaku.iinaa.net/>

おとな高校創作部

創刊号

2014. 09. 01

Create
—くちえいと—



No.001 Create 創刊号

■ 目次

目次	1
イラスト こんそめ	2
小説 一戸建て、庭付きの家の縁側で。 / そらを	3
漫画 進撃のかに 特別予告編 / k a n i	6
小説 しぐれ恋四記～秋の頁～ / 鈴神 小鳥	10
その他 設定 / けーすけ	24
・モノアイ～ある日幼馴染が急に単眼になった件～（仮）	
・高校デビュー失敗しちゃった系男子（仮）	
フリートーク	27
後書き	32

表紙イラスト：鈴神 小鳥

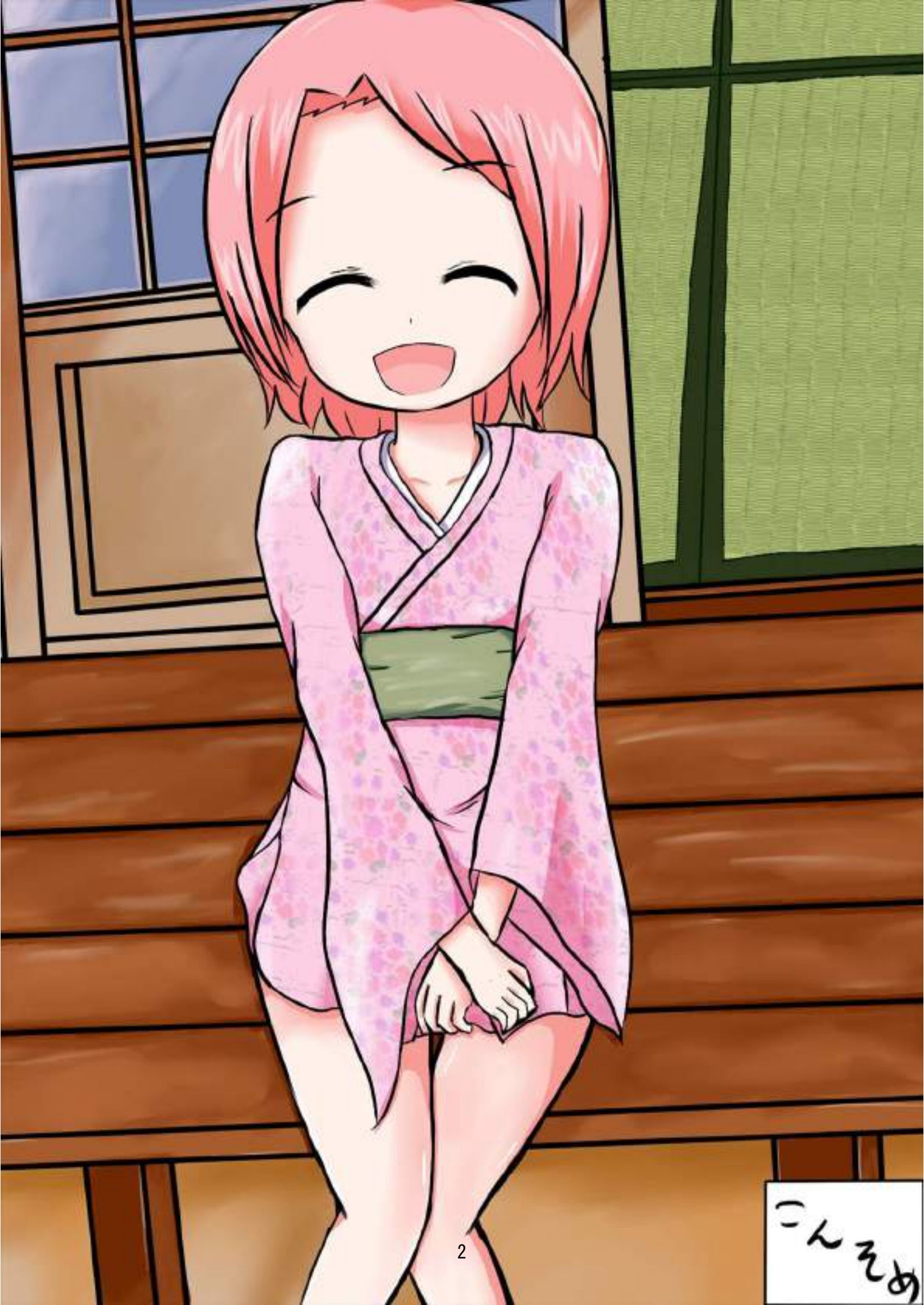
No.001 **Create** 一創刊号一

公開日 2014.09.01

3の倍数月に部誌発行中！

おとな高校 創作部

<http://sousaku.iinaa.net/>



一戸建て、庭付きの家の縁側で。

そらを

おろかなぼくをゆるしてほしい。

彼がそう言ったのが、つい先ほど。

私が彼を引つ叩いたのが、それから二分くらいしてからだろうか。彼があまりにも言い訳をするので、腹が立ったのだ。内容はと言えば……。

「だって本当のことだろう。君と比べると僕は遥かに愚かな軟弱もので、一緒に並ぶどころか、同じ空気を吸うのもなんだか申し訳ない。僕はチビだしデブだし、根暗だし……」

「だからチビでデブで根暗なのはどうしたのよ。私がそれでいいって言っているの。愛嬌ある顔してるし、根暗なのはまあ……多少は直してほしいと思っている

けど、それだって個性よ」

「僕は泣き虫だし……」

「あら。私はあなたの泣き顔好きよ」

そう言えば、彼は顔を真っ赤にする。ウブだ。

「あなたね、自分が自分を全部愛してくれる人なんていると思うの？ 好きなどころ、嫌いなどころがあつて当たり前。もう一度言うけど、チビでデブは愛嬌もあるしいと思うけど、根暗は直してほしいの。あなただって私に直してほしいところ、あるでしょ？」

「な、ないよ……。君は綺麗だし優しいし、笑うとすごく可愛いから、直してほしいところなんてそんな……」

更に顔を赤くしながら言う姿に、説教をしている最中だというのにキュンときてしまった。

「あ、のね……。私だって別に完璧超人ってわけじゃな

いのよ？ 一個くらい……」

「ない！ 僕は君の全部が好きだから！ ちよつとわがままだなんて思うこともあるけど、それも好きだから！」

大通りの真ん中で、彼が絶叫するように言う。

通りすぎる人達が振り返って、なんだなんだ？ と立ち止まる。

というか、やっぱりがままだと思われていたのね……。わかってはいたけど、ちよつとショック……。

と、そういうことではなく。

「ぜ、全部好きなら、何で付き合ふのやめるとか言うの？」

「だって……僕には君が眩しすぎて、頭がクラクラするときがあるんだ。そんな眩しい君とずっと一緒にいたら、僕は倒れちゃうよ」

戸惑うことなく、彼は言った。

「今でも君と付き合っているなんて信じられないんだ。僕はこんな奴なのに。僕が君の立場なら、僕と付きあおうなんて思わないよ。それなのに……」

先ほどの殺し文句のようなものはスラスラと言ったのに、突然口ごもる。自分の手と手を合わせて、人差し指を交互に回すのは、彼が切羽詰まっている証拠だ。

私は、はあ、とため息をついて、彼を見る。

「私はね、あなたがあなただから付き合いたいって思っただの。あなたじゃないと嫌なの。それとも、あなたが付き合ふのは私じゃなくても大丈夫なの？」

「そんなことない！ 僕だって君じゃないと嫌だ！」

「それなら！」

「君と付き合ってから、付き合ふ前以上に君のこと好きになる！ ふわふわして、ドキドキして、眩しくて！」

これ以上は本当に……！」

こんな文句が何処にあるというのか。嬉しい。私は彼に近寄り、軽く唇を重ねた。

「え……？」

「そこまで言うなら、これで終わりにするわ。でも、私はあなたを好きでいるから。今言ったことも絶対忘れないから。一生あなたのこと考えながら生きてやる」
ボン、と音を立てそうなほど、彼の顔は赤くなる。
これまで見たことのない可愛い赤に、私は笑った。

「なんで僕がよかったんだい？」

あなたはいつもそう言う。

「あなたが一番好きだったからに決まっているでしょう」

私は決まってそう言った。

「君が僕の何処を好きになったのか、今の今までわからないままだよ」

「教えてほしいの？」

彼は好奇心を隠し切れない顔で、頷いた。

「それはね」

一戸建て、庭付きの家の縁側で。彼のしわくちやになった手に、自分のしわくちやになった手を重ねてこ
う言った。

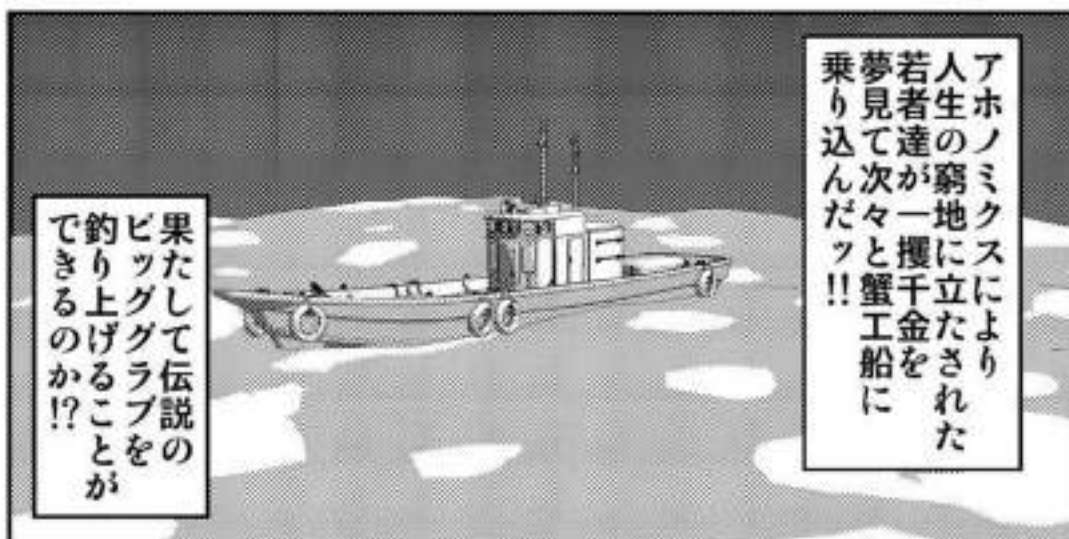
「あなたの笑顔が眩しくて、頭がクラクラしたからよ」

進撃のかに

特別予告編

まんが/kani

2014年、増税大不況!!!





かにVS人類 世界大戦勃発!!!

ボムッ

命中!!!

その美味な
カニミソを
ぶちまけるオ!!



連合軍を
ナメるなよ!!
下等生物に
分を弁え
させてやる!!



バッ

誰だよ
お前!?



ここは俺に
任せてお前は
先に行けッ!!

全米を震撼させた一大スペクタクル!

進撃のかに

2014秋全国ロードショー!!!

んなワケあるか(笑)



鈴神小鳥

しぐれ 恋四記

～秋の頁～



一年 時雨
(ひととせ しぐれ)

物語の主人公
面倒臭がりの出不精
趣味は読書と昼寝
首に大きな痣がある



富士山 風佐
(ふじやま ながさ)

時雨の友人？
主人公を無理に連れ出すのが趣味
何故か怪我が絶えない



朱里
(あけさと)

風佐が連れていた謎の女性
どこか寂しげな雰囲気を持つ

「しぐれ恋四記 秋の頁」 鈴神小鳥

あの男はいつも、季節をつれてやってくる。

あれは、ある暑い日の夕方のこと――

* * *

いつの間に春が終わり、夏が来たと思えば、また終わろうとしている。次々と移り変わる季節の境目は、年を増すごとに薄ぼんやりとしたものになっていく。やがてそのまま、
「暑い」「寒い」と、それだけのものになっていくのかもしれない。

夕涼みにと出た縁側、私は腰を下ろした。

大して興味もない書物を片手に抱えて。

この季節に似つかわしくない、青白い素足を放り出す。長い髪が汗ばんだ首筋に張り付いて、気持ちが悪かった。

もう九月に入ったというのに、一向に涼しくなる気配がないのは何故か。蟬は相変わらずうるさく鳴くし、日中外に出れば陽炎が景色を歪ませる。もうじき日が傾くこの時間になっても……けして快適とは言えない。これぞでなにか「夕涼み」だろうか。

また、汗が流れる。私は眉をひそめた。襟元を緩めてハタハタと動かすと、生ぬるい風

が肌に当たる。大して意味があると思えない。

（早く過ぎしやすい季節にならないものか）

そう考えながら、持ってきた本を開いた。

ふと、首筋に触れてみる。私の首には赤黒

い、大きな痣がある。ある日突然に現れたそ

れは、日に日に濃くなっていくなかに見えた。

多少見苦しいとは思いつつも、害がある

わけでもなく、気にしないようにしていた、

――が、最近たまに痛むことがあるのだ。

ジャリ

近くで砂を踏む音。私は慌てて、並んだ文

字に視線を落とした。

「時雨しぐれ、いるのか？」

茂みの影から、見慣れた男が現れた。その

姿を見ようとせず、私は生返事をする。

どうせまた「面白いものを見つけた」なん

て言っ、外に連れ出そうとするのだ。この、

暑い中。

こちらに気づいて、近づいてくる足音を聞

きながら、文字を目で追った。目にとまった

一文が、ただの文字の羅列となって消えてい

く。男が真横まで来るのに気づきながら、素

知らぬ顔でそれを読む振りを続けた。

――チク。

「!？」

うなじのあたりに妙な感触を覚え、飛び上がる。その瞬間、耳に残る羽音をたて、何かが頬をかすめていった。

「うわっ」

必死に振り払う手が、空を切る。それはすでに飛び去った後だったが、そんなことを考える余裕もなかった。

ハッと顔を上げると、そこには夕空を背景にして飛んでいく一匹の虫の影。

（蝉……？）

隣にはニヤついた男。蝉が止まっただろう自分の首をさすって、私はようやく何が起きたのかを理解した。

「お前、何すんだよ」

精一杯の力を込めて睨みつける。まるで悪気など無いのだろうこの男は、やけに楽しげだ。

「ツクツクボウシ」

まるで少年のような表情で、そうひとこと。

「……………」

怒る気も失せて、代わりに小さなため息をついた。

「ヨイシヨ、っと」

多少ジジ臭い掛け声とともに、男は縁側に腰を掛けた。自由奔放。彼を一言で表すなら、

その言葉で間違いないだろう。

「ひと夏で死んでしまう生き物を、あまり虐めてやるな」

「向こうから来たんだ」

そんな馬鹿なことがあるか。心の中で思いながら、私もまた隣に座った。

この男、名は風佐^{なぎさ}という。数年前に出会って以来、何かと家を訪れては外へ連れ出そうとする。なんとも悪趣味な男だ。

大して気が合うわけでもないのに、何故私に構うのか。気づけばすっかり彼の遊び仲間

のようにされてしまっている。

「でもよ。ツクツクボウシって、捕まえるの、難しいんだぜ」

風佐が得意げに言う。そして、少し寂そうな表情で空を見上げた。

「……夏も終わりだな」

あの蟬が、飛んでいった空。

（ツクツクボウシ。そういえば、夏の終わりを告げる虫だったか）

風佐に言われるまで、そんなことさえ忘れてしまっていた。耳を澄ますと確かに、聞こえる。雑音でしかなかった蟬の声は、明らか

に真夏のそれとは変わっていた。

風佐は話を続ける。こんなにも楽しそうに虫の話が出来るのは、多少羨ましくもあった。色黒な肌から真っ白い齒が覗いて光る。風佐の話に適当に相槌をうちながら、私はその焼けた肌を眺めた。

（また、一段と焼けたんじゃないだろうか）
自分と見比べるから、尚更だろうか。まるで碁石のように正反对で。これが並んで歩くのだから、さぞ滑稽だろう。

「なあ、聞いている？」

不満げに覗き込む、風佐の顔。

「もちろん」

そう笑って見せるが、どうも疑わしそうにこちらを見るから、少し可笑しかった。あまり雑に扱って怒り出しても面倒だ。

「それで、今日は何の用？」

持っていた本を閉じると、再び風佐に笑みが戻る。単純なものだ。

「付いて来てほしいところがあるんだ」

「……今から？」

想像していた通りの展開。あからさまに嫌そうな顔をして見せても、もちろんお構いなし。風佐は急かすように「ほら」と、着物の袖を引っ張った。

（ほんと、迷惑な奴）

そんな風に思いながらも、しふしふ立ち上がる。結局着いて行くのだから、自分も嫌ではないのかもしれない。

（認めたくはない、が）

「おい、風。おいってば」

風佐は脇目も振らずに歩き続ける。声をかけても「もうちょい」と、軽い返事が返ってくるだけ。振り返りもしない。

（帰りたい）

そんな風に思い始めて、何分歩いただろう

か。普段この辺りを駆け回る子供らも、今は見当たらない。そりやそうだ、もう辺りは暗い。だから。私は立ち止まり、ため息を付く。

（このままそっと引き返してしまおうか）

そんなことを思い始めた頃。とある茶屋の前で、風佐は突然立ち止まった。

「……朱里（あけさと）ちゃん！」

風佐が手を振る。その先に見つけた、一人の女性の姿。私は一瞬で目を奪われた。

——赤く色づいたもみじの葉が、一面に広がるのを見た気がしたんだ。

朱里というのは、そんな不思議な女性ひとだっ

た。黒く艶のある髪、透き通るような白い肌に、真っ赤な口紅が映えて。寂しげな表情はどこか妖艶で、目が離せなくなる。

——首に小さな痛みが走る。私は我に返った。

ほんの数秒のこと。その一瞬の間、どこか別の世界に連れて行かれていたかのよう。現実離れしたその姿といい、少し不気味に思うほどに、彼女は人を惹きつける。

朱里は風佐の姿を見つけて、僅かに微笑む。そして、どうやら私の存在にも気付いたらしい。こちらを見て——目が合った。

彼女の瞳が大きく見開かれた気がした。そ

れは、ほんの一瞬のこと。直ぐに表情は元に戻ってしまったけれど。

彼女が会釈をする。私も反射のように、軽く頭を下げた。

（気のせい……だったのか？）

私は風佐の傍にそっと歩み寄り、彼の耳元に口を寄せた。

「知り合いか？」

この辺りでは見たことがない女性だ。少なくとも私は知らない。

風佐はこちらを見て、にやりと笑った。

「——いい女だろ？」

「……………」

何とも答えられず、押し黙る。

確かに顔は整っているし、雰囲気のある女性だとは思う。しかし――

顎に手を当て考え込む私に、風佐は憐みの目を向けた。

「ほんつと、人生損してるよな、お前」

「余計なお世話だ」

そう言い返しながらも、その日は何か、心にモヤモヤとしたものが残った。

* * *

――あれから数週間。あの日以来、風佐が朱

里を連れて歩く姿をよく見かける。家に連れてくることもあった。私はどうも気まずくて、目を合わせることもできないのだけれど。

当然のように、風佐の口から出てくるのは、彼女の話題ばかりで。

――カサリ。

枝が揺れる。人の気配。私は眉を寄せた。

（今朝もやって来て、散々話したばかりだったのに。……それも、一方的に）

私は中々読み進まない本を、音を立てて閉じた。近づく足音。私は静かにため息を付くと、文句の一つでも言ってやろうと口を開く。

「お前、また来……」

言いかけた言葉は、そこで途切れた。顔を上げた私の目に映った、思いがけない人の姿に――思考が、止まる。

「……朱里……さん？」

見慣れた庭の風景が一気に華やいで、どこか別の場所のようだった。私は口を閉じることも出来ず。なんとか動かしした唇からは、魚のように空気だけが漏れる。

「来て、しまいました」

戸惑いを隠せない私に、彼女は微笑みかける。頬を汗が流れていった。

「どうして？一人でここまで来たのですか」

出てくる疑問を彼女に投げつける。

（風佐は？）

彼女は私の心の内に気づいているのか、額に八の字を寄せた。

「少し……お話し、してみたくて」

彼女は言葉を選ぶようにして、言う。そして、小さく首を傾けた。

「お隣、宜しいですか」

遠慮がちな彼女の言葉は、ますます私を困惑させる。特に断る理由も見つけられずにと、彼女は私の隣へと腰掛けた。体がこわばる。

ひととせ

「……一年さんは、ずっとこちらにお住まい

なのですか？」

「……ええ、まあ」

無意識に掌に力がこもり、汗が滲む。彼女は瞼を伏せると、その小さく赤い唇から「そう」と呟きを漏らした。

「……」

カコーンと、ししおどしが響く。少しの沈黙にすら気まずさを覚えて、私はなんとか言葉を探り出す。

「あの……朱里さんは、この辺りの生まれでは、ないですよね？」

「ええ、越してきたばかりです。数ヶ月ほど前に」

彼女は顔を上げると、柔らかに微笑んだ。

「風佐さんが、色々なところに連れて行ってくださって」

そう言って両手を合わせる彼女は、本当に楽しそうで。それを見ながら私は、「ああ、睫毛が長いんだな」とか「可愛らしい笑顔だな」とか、そんな事を思っ。――そんな自分に気づいた私は、戸惑い、驚く。

（ああ、＼いい女＼とは、こういうことか）――ズキッ。

突然首に刺すような激しい痛みを感じて、顔を歪める。

（また、だ）

痣に手をやると、そこは僅かに熱を帯びて
いるようだった。朱里は当然驚いて、その様
子を見つめていた。

「この痣……」

彼女が覗き込むようにして、顔を寄せる。
白く華奢な手が、ひたりと私の首に当たるの
が分かる。ほのかな花の香り。目の前には、
透けるようなそのうなじがあった。

トクン、と心臓が鳴る。

（――触れたい）

私はその頬にゆっくりと手を延ばした。

ほんの一瞬、風佐の顔が頭に浮かんで、直
ぐに消えていった。

触れた指先に気づいた朱里が、私を見た。
瞳孔が開く。朦朧とする頭。まるで無意識の
ように私は、唇を重ねた。

彼女は体を固くして、でも、やがて緊張は
解けていく。一筋の涙が彼女の頬を濡らし、
それは私の指を伝う。首筋に鈍い痛みを覚え
ながら、私はその雫を拭った。

あの男はいつも、季節をつれてやってくる。

その度、私の世界に色が戻る。

そして私の麻痺した心は、動かされる。

（冬号に続く）

ああ、時雨驚くだろくなあ。

楽しみだなあ……（悪い顔）

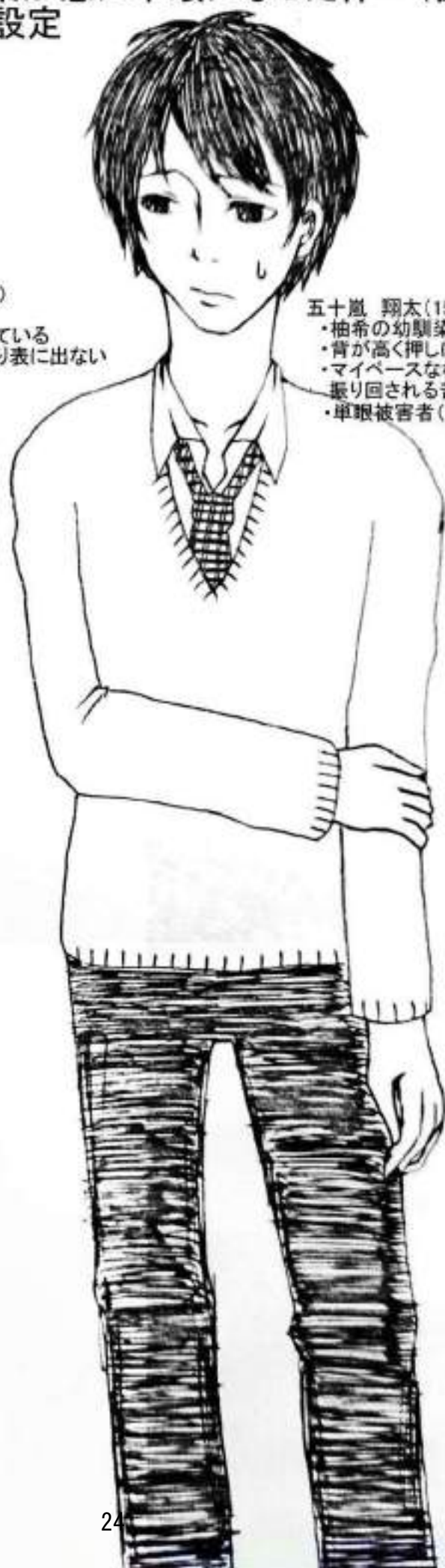
ツクツク
ボウシ
↓



けーす!モノアイ～ある日幼馴染が急に単眼になった件～(仮)
設定



原田 柚希(15)
・マイペース
・肝が据わっている
・感情があまり表に出ない



五十嵐 翔太(15)
・柚希の幼馴染
・背が高く押しに弱い
・マイペースな柚希に
振り回される苦勞人
・単眼被害者()

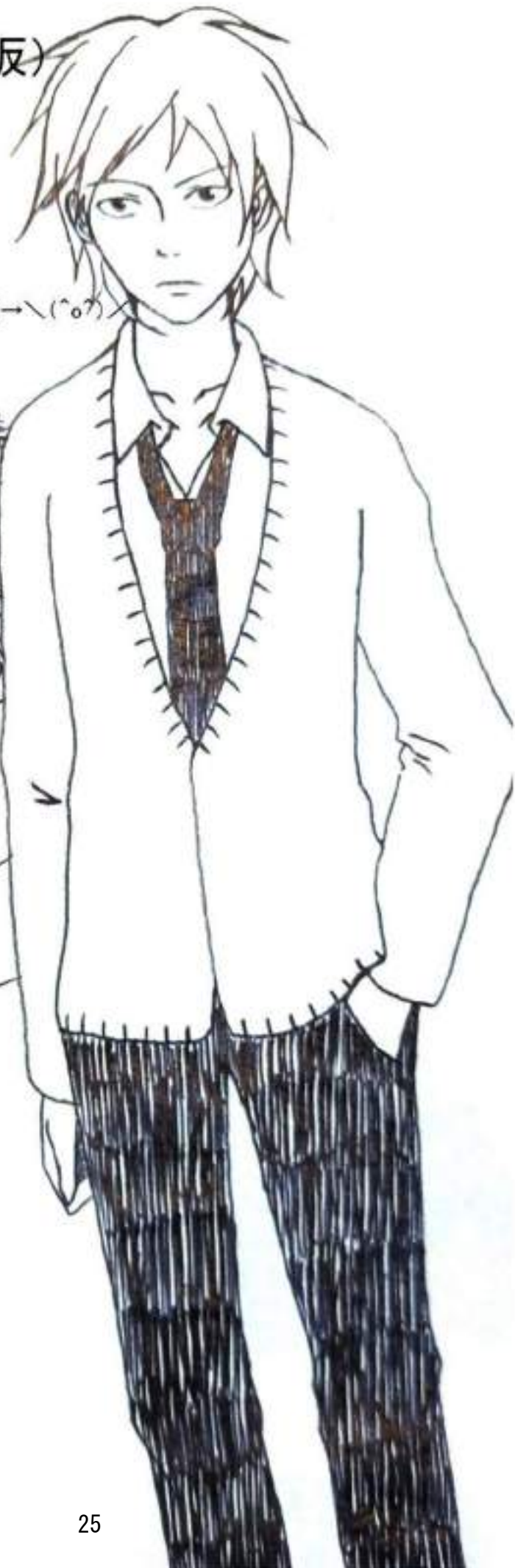
高校デビュー 失敗しちゃった系男子(仮) 設定

田坂 喜太郎(15)
(たさか きたろう)

- ・女子がかわいいと有名な高校へ行ったが
今年から男子と女子が別々の校舎だと判明→\(^o^)/
- ・なぜかホモホイホイに
- ・本人はノンケ



中学時代



九重 まどか(15)
(ここのえ まどか)

- ・喜太郎の幼馴染であり同級生
- ・今年から男女別なのを知っていたが面白そうなので黙っていた
- ・趣味:お菓子作り、特技:裁縫



旧
スク

excellent

フ
リ
ス
ク
?very
good新
スクう〜ん……
or2

皆様はじめまして、こんそめと申します。
このたびは、このようなイベントにお誘い
いただき、誠にありがとうございます。
まだまだ若輩者ですが、頑張っていきます
のでよろしくお願い致します m()m

近々同人誌を作成するためにメンバーを探
そうかと思っているので、色々情報を教え
ていただければ、とか思っています。いつ
もどおりの展開だと、構想だけで終わりそ
うですが ……。

絵については多くは語りません(止まらな
くなります)。

スク水は良い物です。

これからもよろしくお願い致します。

はじめまして！

おとな高校創作部創刊号イエイ！ ٩(๑ ۰ ๑)۶
できあがりがすごく楽しみです！

あ、私「そらを」と申します。初めまして。
イラスト、漫画、小説をかいています。
今回はイラストと小説で参加させていただきました！
小説はタイトルが難産で……最後まで悩みましたが、
あの長いタイトルに落ち着きました。
ちなみに今日は締切前日なんですが、タイトルを
ど忘れしました(・ωく) 気に入ってることだけは
覚えてます……。

そらも



フリートーク

はじめまして、カニです。

短編、いかがでしたか？

字が汚い？ フハハ!! (フハハ)

普段はゲームとか作ってます。

やるめもそこそこやってます。ダクソIIとか。

10/5 そうさく火田2014秋に出ます。

11/2 奈良女子大ComiC★Party26
にたぶん出ます。

心がびゅんびゅん

するような作品をつくりたいですねー



あつくてだらけるうさぎ

では!!

2014. 07. 29 (火)

後書き

鈴神小鳥



▶ 初めまして、^{すずかみ ことり}鈴神小鳥です。以後、お見知りおきを！ 見づらいの分かって、
あえて手書きでいきたいと思います(´▽`)笑 スミマセン。朱里

▶ さて修羅場の子感を残して終わった

しぐれ恋四記 - 秋の貢 -。今日登場

した^{あかり}朱里ですが、彼女の名は、新選組

総長・山南敬助の恋人、明里さんから

頂いております。(漢字的に、'あかり')

とか'しかり'とか読んでしまおうですが...)

▶ 秋の貢とくれば、もちろん次回は

"冬の貢"となります。

冬をイメージした新キャラも

登場予定ですので、

どうぞよろしくお願い

致します!!

▶ ということで

また12月にお会いしましょう。

サラバ L(´o`)ﾉミミ



Free Talk

この度は大人高校創作部部誌『Create』創刊、
おめでとうございます！

初めまして。副部長のけーすけです。
副部長とはいっても名ばかりで、すべて部長である
鈴神さんに丸投げしている適当人間です。

今回は考えている話の設定を二つ掲載させて
いただきました。

アナログですごく見づらいものと
なっていますが、片手間にでも
見ていただけたら幸いです。
形にする際には四コマ漫画のような形式、
あるいは小説として出せたらと思っています。

最後に私信となりますが、
締切に関する叱咤激励や編集ソフトの
使い方など、鈴神さんには頭が
上がりません。
本当にありがとうございます。



おとな高校 創作部

創刊号 後書き

おとな高校創作部 **Create**、最後まで読んでいただきありがとうございます。
お初にお目にかかります、知ってる方はこんにちは、部長の鈴神です。

6月下旬に活動開始した創作部。部員の数も9名まで増え、いよいよ初めての部誌！……ということで、無事に発行できることを嬉しく思います。

今回、切が慌ただしくなってしまって、ほんとうに申し訳なかった(´Д｀)
本来3ヶ月あるはずの製作期間が、1/3の約1ヶ月しかとれず(笑)そんななか提出して下さった部員さんに、感謝感激です！

次回冬号ではリレー小説も企画しております。製作期間もしっかり用意して(笑)更にパワーアップした内容でお届けできると思いますので、お楽しみに。
今後も **Create**、そして創作部をどうぞよろしくお願いいたします。

部長 鈴神 小鳥

【次回の部誌発行】

Create 冬号:12月1日 公開

おとな高校 創作部

創作活動を楽しむおとなのための部活動です。
イラスト・小説・漫画・詩・音楽など、表現方法は問いません。
年4回の部誌発行を中心に、ゆったりまったり活動中。

詳しくは HP をご覧下さい
<http://sousaku.iinaa.net/>

部員(9名)

【鈴神 小鳥 / けーすけ / 葉葉 / こんそめ / そらを神名 雨 / kani / 半泣き / ばしりすく】

<http://sousaku.iinaa.net/>

おとな高校創作部

おとな高校 創作部 |

検 索

<http://sousaku.iinaa.net/>

創刊号

2014. 09. 01

Create
—くろえいと—

no.001 Create 創刊号 2014.09.01 公開